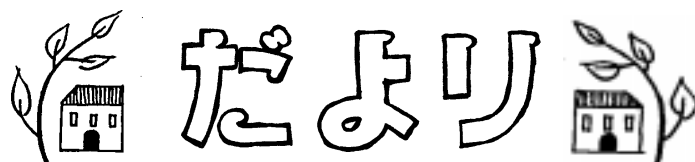


ネパリ・バザーロ

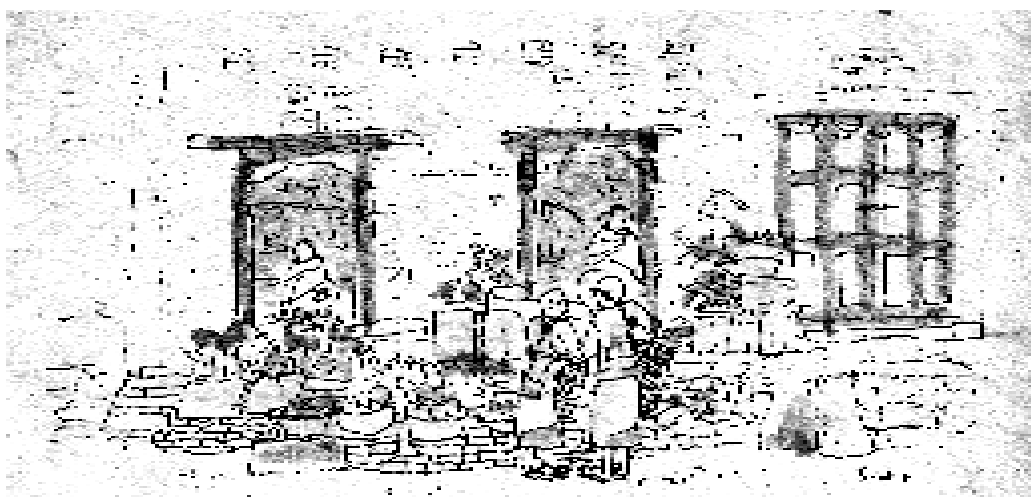


第 15 号

ベルダレルネーヨ通信

1997 年 10 月

ネパリ・バザーロは、ネパールを中心としたアジア諸国のハンディクラフト製品や食品の企画、開発を行い、継続的に輸入を続けることによって就業の場の拡大をめざすフェアトレード団体です。立場の弱い人々、女性、子どもの自立を支援し、貧困の課題改善に取り組めたらというのが私たちの願いです。母体となるボランティア・グループ(NGO)であるベルダレルネーヨ(ネパールの女性の自立と子どもの育成支援の会)のトレード部門として1992年から活動しています。



カトマンズの街角で野菜を売る女性たち・・・坂本ふみさん画

目 次

<特集> ネパールの職業訓練校 その2

「バラジュ訓練センターを訪れて」

魚谷早苗・・・2

「カトマンズの乗り物事情」

春山洋子・・・5

「生産者をたずねて」 その4

ーWSDPポカラー 土屋春代・・・6

「とても愉快的トレッキング入門」

私的

大野達雄・・・8

行ってきました

「不思議な国ネパール」へ

太田隆子・・・9

「活動トピックス」

土屋完二・・・10

「あ、これ不思議」

「あ、これ新しい」 廣田麻紀子・・・11

お知らせ・編集後記・・・12

特集：ネパールの職業訓練校 その2

バラジュ訓練センターを訪れて

魚谷 早苗

前回の通信では、資料を読み漁って「ネパールの職業訓練校」の状況をレポートさせていただきました(前号をお読みでなくて、興味がおありの方はネパリー・バザールまでお問い合わせください)。かなり分厚い資料を読んだおかげで、それまで皆目知識のなかった技術系の職業訓練校を通して見るネパール事情はなかなか興味深いものでした。それでも、所詮文字の上のこと、バラジュ技術訓練センター(BTTC)はネパールではトップレベルといえるようですが、実際の状況はどうなのか疑問が残りました。

この夏、短期間ながらネパールを訪問することになり、BTTCも訪れてみることにしました。幸い、日本から青年海外協力隊で派遣され働いている先生もいらっしゃるということで、日本との比較、外国人から見た客観的状況も聞けるのではないかと期待して出かけていきました。また、私たちが支援しているホームの子どもたちの進路の一つとして、という視点からも見てきたいと思いました。

<最近の変化>

BTTCはカトマンズの北西にあります。守衛さんのいる門を入ると4階建ての管理棟があり、その奥の中庭の向こうに2階建ての広い実習棟があります。ゆったりとした立派なたたずまいです。4階まであがって校長先生に挨拶をして協力隊の方を呼んでいただきました。以前メンバーが訪問したとき少しだけお会いした電気科の金尾さんは今年2月からの派遣ですが、その他に、5月から新しく機械科にも安田さんが入られていました。事前に送っておいた前号通信と訪問のお願いは、ネパールではありがちな事ながら届いてはいませんでした。海外職業訓練協会の報告書を前号の資料にしたこととお話すると、状況はいろいろ変わってきているという

ことでした。

変化の第1は奨学金がなくなり学費がかかるようになったことです。月120ルピー(約250円)の学費は、日本では少額ですが、ネパールの、特に貧しい家庭ではかなりの負担となります。定職に就いていても月給が数千円相当の人が多いのですから。学校の予算不足から学費を徴収することになったようです。社会に出てすぐに技能を発揮できるよう、卒業時に道具一式を提供していた制度も予算の関係で廃止になってしまいました。

また、9割以上を誇っていた就職率は、最近落ちてきているようです。以前から来ていた航空会社や軍隊からの求人も減ってきているようです。大学の卒業生に求人が流れているとか…。原因はいろいろあるでしょうが、以前は3年だったコースが1992年から2年に変わったことも一因のようです。短縮の理由は分かりませんが、センターを運営している審議会が新しい訓練計画として取り決めた際、履修内容の質が落ちることはない公表していたそうです。けれども、お二人が3年コースだったころの授業内容の記録を見ると現在の2年生の卒業レベルはやはり劣っていると言わざるを得ないそうです。

旋盤の実習



<狭き門>

それでも、毎年の入学希望者は多く、120名の定員に対し、450名の受験生が集まります。1番人気は電気科で、40名のクラスに250名が殺到するという狭き門です。電気科人気は日本でも同様だそうです。家電メーカーへの就職希望者が多いこと、他の科に比べて女子学生が入りやすいことなどが理由のようです。カーストによる職業制限の範疇に入っていないことも影響しているかもしれません。さて、その狭き門の選考は試験と面接で行われます。過去の試験問題を見せていただきましたが、8ページほどの問題用紙に、知能検査的な問題(違う角度から見た同じ立体図を選ぶもの)、計算、図形、物理など理数系の問題が並んでいました。難しいのか、簡単なのか...私には判断しがたいのですが、いずれにしろ、この競争率を勝ち抜くには面接も含めて高得点を得ないと無理なのですから、いい学校だからホームの子どもたちにぜひ...と簡単には行かないようです。

<教育内容>

B TTCは、1962年にネパール政府とスイス開発協力の共同プロジェクトで設立されました。スイス開発協力は資金だけでなく専門家、管理者など数名の人材も派遣してきました(外国の援助に頼らず独立して運営していけるようにはならず、現在スイス開発協力は人の派遣を止め、資金援助のみになっています)。1982年に現在の新しい建物に移りましたが、校内設備の随所には、教育面でのスイスの細やかな配慮が感じられます。その第1は安全教育です。学生たちの使う作業所のあちこちには人工呼吸など救急処置の方法が図入りで掲示されています。以前からいるスタッフにはこうした安全教育の精神が根づいていて、スイスがいかにかこのことを重要視していたかが判ります。機械科で溶接を学ぶ実習室は溶接時に出る有毒物質を吸わないように、作業台一つ一つの頭上にダクトが設置されています。

手作業の授業



日本では法令で義務づけられているこうした設備もネパールではなかなか見かけることはありません。大きな機械や電気を扱うこうした職種では安全の確保は非常に重要ですが、町工場などでは安全性が後回しにされているのが実状です。

実習には、旋盤などの数百万円相当の機械が並び、学生たちが製図どおりの寸法で金属を削っていました。機械はスイスの影響かドイツ製などヨーロッパのものが多く、中古を払い下げてもらって使っています。オートメーション化された日本の大工場では見かけませんが、日本でも町工場では試作品など少量だけ生産するときのために使っている汎用機械というタイプのものだそうです。もっと高度な先進的機械を入れたいという要求もあるようですが、ネパールの社会に出て実際使われている技術レベルや、「基本」を知っていることの必要性から、このレベルの実習が適しているというのが安田さんの意見でした。手作業での板金の成形は日本の工業高校ではほとんど行われなくなっていますが、ここでは長い時間をかけています。社会に出てからも必要性が一番高いのは手作業のレベルだからです。この時はレターケースを作っていました。出来上がったものは校内の事務用品として実際に使用します。実習で作成するものは、作って終わりではなく、実際に使用するのを基本とします。前回の原稿に書いた「売れる製品を企画製作し、地域に販売する」というのも、2年間の1カリキュラムにそうした授業があるの

かと私は勘違いしてしまっていたのですが、実習で作成されるすべての課題が、校内で使うことができるのか販売できるものという視点で決められているのです。製作実習にはかなりの材料費がかかりますから、使えないものを作っておしまいというわけには、予算上行かないのは確かです。電気科の金尾さんも、販売できる実習課題を考えるのに頭を悩ませているそうです。製品にならない使用済みの電気コードなどは、町工場に払い下げられます。実習のために短く切ってしまうので、工場にとっては使い勝手が悪く、安い値段で売ることになってしまいます。

< 厳しい技術校運営 >

BTTC では授業の 80% 以上を実習に当てており、理論などの講義よりも重視しています。これは社会で実際の役に立つ技術を取得するためには非常に重要なことですが、実習が多いということは、高額な材料費を必要とするということを意味します。材料費にいくらかけられるかで、授業のレベルが決まるといっても過言ではありません。ネパールの技能訓練は機材と情報が不足しています。製図の授業は、日本のような立派な製図用デスクではなく、教室の長机に木の製図板を置いて実習していますが、それでもあるだけいいといえます。電気科の機械類の稼働率はわずか 30% で

す。教師の力量不足で「使えない」というものもありますし、半分以上が壊れてしまってもいます。それでも他校に比べると恵まれているといえるのだそうです。図書館も書棚数個分の蔵書量でしたが、専門書があり、毎日の新聞各紙も閲覧することができるのは、学生にとっては貴重な情報源です。

実習で作ったもの、使ったものはできる限り使用したり換金していますし、材料や工具に無駄や紛失がないよう、各科には倉庫管理者がいて、細かくチェックして学生に渡しています。そうして財源をやりくりしながら、職業訓練校の中ではトップレベルの教育を提供している BTTC ですが、機械や建物が老朽化してくれば日常にかかる以上の資金が要りますし、日々進歩する技術を取り入れ、教師自身が向上しつづけていけることも必要です。BTTC は、自立できる仕事を求める貧しい若者たちに質のよい教育を提供するために、ネパールの工業の発展を支える技術者を生み出していくために、そして BTTC に続く他の技術訓練校に道を示すためにも、数々の期待と役割を背負っていると言えます。

お忙しい中、見学や原稿のチェックにご協力くださった青年海外協力隊の金尾さん、安田さん、ありがとうございました。ご健康、ご活躍を心からお祈り申し上げます。

おたより紹介

拝啓、先日、上野公園緑の相談所元所長の F さんから頂いたコーヒー（ヒマラヤンワールド）の味にビックリ。気のせいかネパールの香りが タイムマシンに乗って部屋中にひろがります。

神官・巫女等スタッフにふるまったところ皆さんから「美味しい」と大好評で気を良くして大サービスをしました。

上野東照宮ぼたん園 園長 平沢一郎様

横浜で「国際協力 NGO 祭」開催

今夏オープンした MM 21 地区のクイーンズスクエアにて「出会い・発見・私にできること」をテーマに約 40 団体が参加。

期 日 11 月 23 日（日）・24 日（祝）

時 間 午前 11 時から午後 6 時まで

内 容 県内や首都圏の NGO 団体が、その支援活動をはじめ、現地の人々の生活・文化等を紹介し、併せて各国の手工芸品等を販売します。また、NGO 活動に関心をお持ちの方に相談コーナーも開設します。

カトマンズの乗り物事情

春山洋子

ネパールの起伏の激しい地形のために問題となるのは、交通の便が非常によくないことです。カトマンズの外では、ヤクや馬、人間しか通れない道が沢山あります。

が、ことカトマンズでは乗り物は、タクシー、バス、バイク、オートリキシャ(3輪タクシー)リキシャ(自転車でひく)、乗り合いテンプーと、とても便利です。

市内中心部の語学キャンパスに通う時、私が使っていたのは、バスと乗り合いテンプーです。この乗り合いテンプーは、3輪トラックの荷台を改造して座れるようにしたもので、6人乗りや10人乗りがあります。走る路線が決まっています、手を挙げて合図すると、空いていれば乗せてくれ、降りる時は屋根をドンドン叩けば、止めてくれます。

バスは最低3ルピー、乗り合いテンプーは4ルピー位からです。1回1回はそれほど高くなくても、乗り継いで毎日通ったりすると、それなりにお金はかかります。乗らずに長い距離を歩いて通っている人ももちろんいるでしょう。

バスやテンプーの中では、いろいろおもしろい光景に出会えます。

例えば、テンプーでは、幼い子どもは代金を取られない代わりに、立って乗ります。

母親と子どもが乗り込む時、たいてい他のおじさんが子どもを抱えて座るのです。

最初は、知り合い同士かな、と思いましたがそうではなく、どうやら女性に対する心遣いのひとつのようです。お母さんはすました顔で一人で座っています。

また、バスはたいてい混んでいます。日本のように時刻表などないので、ひどい路線だと次のバスが来て、クラクションを鳴らし続けるまで止まっていて、一人でも多く乗せます。バスの後ろには車掌の兄(あん)ちゃんが乗っていて、バスの行き先を叫び続けます。そして車体をドンドン叩いたり、ほればれするような口笛

を吹いて運転手に合図をします。もちろん代金ももれなくもらいます。(小さい男の子はこの車掌の兄ちゃんになりたがります。)

代金の払い方もまた面白いものです。すいていればバスが走っている間に兄ちゃんが集めに来ますが、一人としてさっと払う人はいません。兄ちゃんに2度3度とせつつかれてしぶしぶポケットからお金を出し、渡すのです。3ルピー-区間に乗ったおばさんは「こんなに近いんだから、ハイ2人で5ルピー-ね」5ルピー-だけ渡し、さすがの兄ちゃんもこれには負けたようです。

私はさっさと払ってしまおうと、バスの中でお財布を出して用意しましたが、それを見ていた人がいたらしく、家に帰ったらバッグからお財布が消えていたことがありました。ショックでしたが、人前でお財布を出した自分が悪かったのだと、翌日からはバス代はネパール人のようにポケットに入れることにしました。

オフィスが始まる朝10時前のバスはギューギュー、日本のラッシュよりすごいです。そんな時、むーっと顔をしかめて立っていると、前に座っている人がすごく小さい隙間を空けて「ここに座れ」と言ってくれたりします。こわい顔をしていた自分を恥ずかしく思うと同時に、日本では見られなくなった人情味に触れられてうれしくなったりするのです。

(注：1ルピー-は、約2円)

アルジュン君、SLC 合格！

ビシュヌさんホームの最年長アルジュン君(19歳)が、SLC(高校卒業検定試験)に合格し、ビジネス科のカレッジ(2年間)に通いはじめました。

就職の資格や大学進学に非常に重要なこの試験に、公立の学校から合格することは非常に難しいことで、アルジュン君の頑張りにより、私たちの喜びもひとしおです。

- WSDP ポカラ -

堅実な成長を遂げて

土屋春代



いつも笑顔のラムカリさん

今年の1月、ざっくりとした厚地の綿ジャケットを見つけた。手織り布、特に厚地は裁断や縫製が難しい。それをあまり手を加えず、却ってシンプルに仕上げたジャケットは、素材の良さを活かしたおしゃれな製品に仕上がっていた。

何色かある中で好きなグレイを選び着てみると、そのデザインの合理性にますます感心した。サンプルとして一着購入し持ち帰った。スタッフや協力者達の評判も良く仕入れはすぐに決まった。

WSDPP の歴史

生産団体の WSDPP はネパールのフェアトレードグループ (FTGN) の一つなので以前から興味を持っていた。この機会に訪ねてみよう今回9月ポカラに向かった。いつも車で行くポカラに初めて飛行機で行った。30分で着いてしまい、悪路を8時間もガタガタ揺られ腰や背中を痛くしながら着いていたのが嘘のようだ。なんと楽だろう。ネパールは電車が無く、山又山で道路網の発達も難しく、移動の手段としては飛行機が比較的発達している。臆病な私は古く小さい飛行機に乗るのは、最初とても抵抗があったのだが。

着いた日はもう閉まっていたため翌日訪問した。電話で連絡してあったので、代表のラムカリさんはニコニコと出迎えてくれた。

お茶を頂きながらまずプロジェクトの歴史を伺った。8年ぐらい前、ラムカリさん達数人の女性は手織りの技術指導を受けた。7mぐらいに整経して端を腰に巻き付け、最大40cmほどの布幅を輪に織り上げる「いざり織り」と言われる織りの訓練だった。しかしマスターしてもその後の途は無く、皆途方にくれた。訓練だけではどうにもならない。折角技術を身に付けても仕事が無ければ。欲しいのは仕事、現金収入。そこに、ポカラ地域開発センターから設立資金

をサポートしてくれるという話があった。ラムカリさん達4人の女性は10,000ルピーの援助を受けてプロジェクトをスタートさせた。「最初は糸を買うのがやっと。染められず生成だけで織っていました。2年目にやっと黒だけ染められるようになったの。」とラムカリさんは懐かしそうに微笑んだ。布の見本帳を見せてもらうと、今では何十色という色でバラエティ豊かに織られている。わずか数年でここまでにしたこの女性はどういう人かと驚いた。

今日は食べてはいけない日なので...と何も口にせず、目の前でクッキーを食べ、お茶を飲んでる私をニコニコと見守る彼女は穏やかでやさしい人という印象だ。

外へ出て工房や庭を見て歩きながら、続きを伺った。土地は地域開発センターから、建物はユニセフからの支援だが、ミシンや機(はた)等の道具は毎年の利益から積み立てて増やしてきた。現在では5台のミシンと2台のかせくり機(糸を巻き取りそろえる道具)、4台づつの機(はた)と整経台(せいけいだい・たていとを組む台)がある。堅実な歴史が伝わる。壁に品質管理上の注意やアイテム毎の説明が分かり易く紙に書いて貼ってある。2年目から4年間、2人の女性がイギリスのボランティアセンターから派遣された。デザイン、品質管理やマネージメント等、システム構築に大きな貢献をしたことが分かる。

現在働く32人の女性達の写真も貼ってある。最年少17歳のシータさんから最年長のウサさん66歳迄。特にウサさんのこぼれるような笑顔にひきつけられた。しかしこの日は祭りと休日が続いて3連休で誰も居なかった。

残念そうに工房を見て回る私にラムカリさんは、「何人かに連絡をとって明日来てもらいます」と言って下さった。折角の休日を申し訳ないと思いつつも「本当ですか。」とうれしそ



いざり織りという織り方

うな声を出してしまった。ラムカリさんはニッコリとうなずいた。

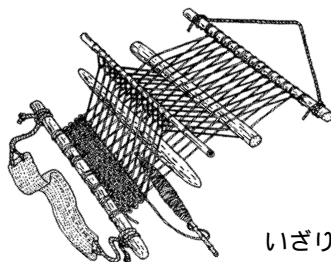
明解な運営・にぎやかな仕事場

次の朝10時頃行くと、女性が一人、機を織っていた。座布団の上に足を投げ出す坐り方で、輪にした経糸(たていとのこと)に通した棒を腰に紐で固定し緯糸(よこいとのこと)を通しては、平板でトントンと叩く。お腹から40センチぐらい織って手が遠くなると経糸をグルッと回してまたお腹のあたりから織っていく。6,5Mぐらい織り上げて経糸が20センチぐらいしか残らなくなると一反が終わる。残った経糸の真ん中を切って丁寧に畳んでいく。36センチ幅で一反織るのに3日掛かる。見ていて飽きない。

途中でガヤガヤと賑やかになり4人の女性達が反物を持って現れた。工房は狭く4人しか織れないので、他の女性は自宅で織り上げ納品し、次の布のために糸をもらって行くのだという。一番年長の女性が私の方を見て、肩がこるし、背中や腰が痛くて大変だと身振り手振りを交えて語る。他の3人の女性もうなづく。ラムカリさんは微笑みながら事務所からノートを持ってきて記帳して行く。一人ずつノートがあって、毎月の仕事を記録し、報酬を払う。報酬の決め方は明解で公平だ。聞けばどんな情報でも隠さずオープンにする。その姿勢から仕事への自信と誇りを感じる。検品しながら、一人一人に指示を与える。その間も笑顔を絶やさないがテキパキとしている。

工房に糸を取りに行く時、年長の女性がラムカリさんのサリーを引っ張り物陰に連れて行った。私もついていこうとしたが、内緒の話があるらしいと分かり引き返した。とんだおじゃまむし。何か耳打ちしている言葉に、首を傾げて聞いていたラムカリさんが、やがて大きくうなずいた。お給料の前借りかな・・・と想像した。

工房にある染め上がった糸の山から、良く色を見て選ぶようにと、実際糸かせと糸かせを比べて細かく注意をしている。糸が決まると、か



いざり機



反物を持って来た女性達

せくり機で揃えて、整経を始めた。いろいろな工程を思いがけず見ることができて興奮してくる。ラムカリさんも、「私もやるわ。見ていてね。」と、整経に加わった。木の台に棒を何本か差して糸をくぐらせて行くと、7m弱の輪になった経糸が出来上がるのだ。250本の経糸で36センチ幅の布が織れる。こうして整経までして家に持ち帰る。ただし、端から端まで4mぐらい広げられるスペースのある家は少ないので、皆、外で織るそう。だから、雨が降ると仕事ができない。でも、家事の合間にお茶を飲みながら、おしゃべりをしながら出来て、多い人で月に2000円以上稼ぐ。農家の副業として、お母さん達の仕事としてこれはとても魅力的だ。

もうすぐ来るダサインの祭りについて、皆で話をしていた(ネパール最大の祭り、日本の正月と盆を合わせたような)。遠く都会に働きに出ていた身内も戻ってきてにぎやかに過ごす。きっとその時に、ごちそうを作ったり、こづかいをあげたりするのに、この収入は役立つのだろう。

ラムカリさんを支えるもの

話の中に病人の話もでて、具合はどうかと他の人が心配する。そんな輪の中心にいて、ラムカリさんの対応は実に細やかだ。7年間で4人から32人まで増えた女性たちの取りまとめをしてここまでプロジェクトを大きくしてきたこの人の力の所以が少し理解できた。

夫と3人の息子がいる。長男は休日で自宅兼事務所に居て、お茶のしたく等、母親の手伝いをしていた。夫もよく手伝ってくれると言う。「だって、何もかも見なくてはならなくて大変だから、家族に手伝ってもらわなかったら、やっていけないわ」強くてやさしくて頼りになるラムカリさんはこれからも家族に支えられ、着実にこのプロジェクトを育てて行くだろう。

とっても愉快的トレッキング入門

私的

大野達雄

『トレッキングって何なの？』
『エッ！ソノー...山を見に行くことかな』
『.....どこの山』 『だからヒマラヤ...』
『エーッ！ヒマラヤ行くの！』
『イヤ、だからソノ...ヒマラヤを眺めに...』
『ヘーッ、じゃ山の観察？』
『イヤソノ、エベレストとか見える所まで歩いて行ってネ...』
『エーッ！そんな所まで登るのー、苦しくないの、高山病とかなるんでしょー』
『イヤ、登りもあるんだけど歩いてネ...ゆっくりとネ登るわけ少しネ...』
『.....だから高いとこ登るわけでしょ』
『イヤ、登るんじゃない、歩いてネ少しソノ登るわけ...』 『だから登るんでしょ！』 『エッ...だからネ歩いて登るわけ...』
『歩いて登るのあったり前じゃない、歩かなくとも上っちゃうのはあんたの頭の血ぐらいでしょ！』 『...!（アカン！トホホ...）』 これは7年前のわが家の会話。一口でトレッキングを説明できないもどかしさ（自分でもよくわかつたらなかったけど）これと同じ会話をあと2度、職場と酒場でくり返すことになるうとは...あーなさない。世間の認識の低さに泣かされた。

でも今はどうだ！ドウダドウダ！《ヒマラヤトレッキング》輝かしい言葉ではないか！日本百名山あたりにウツツをぬかしている中高年のオトツツアン、頭が高い。

とまあ、こんな苦労を経まして（どこが）20日間の休暇をせしめ、ようやく山仲間のTさんと憧れのトレッキングに出かけることになりました。

目標は、ネパールヒマラヤのエベレストが属するクーンブ山群のゴキョピーク5360m。

ここからは8000メートル峰が間近に4座も見えるという、じつにトレッキング界のすぐれもののピークなのだ。

さて、コースは13号で紹介のナムチェバザールを経て、ゴジュンパ氷河から流れ出るドゥードコシ川沿いに登り、氷河の末端を右にかわして、氷河のモレーンと氷河湖の間をぬけ、アブレーションバレーを詰めていくといった按配です。

が、字面では実感が伝わりにくい（私の文章表現力が下手という人もいる）ため、以下Tさんとの会話を再現し、私的トレッキング入門をご案内しましょう。

『あー荷物もって先に行っちゃったよ』
『シェルパとポーター6人位かな』
『オッ、大名旅行ジャン』
『んービーチサンダルが妙に似合ってるな』
『オレこんな軽装で体なまっちゃうね』
『じゃナムチェでビール飲もうぜ』 『...？』
『good morning サープだってさ気分イイね』
『サープ tea please だとも グフグフ』
『タームセルクだ！6000メートルだ！』
『あの奥がアマダブラムよ』
『オレ脈が早くなってきたよ、高山病かな』
『単にコーフンしてるだけじゃないの』
『ついに4000メートル越えたね』
『んー 何てことないね、酒飲んじゃおか』
『ウー 頭イテー酒はダメダー』
『グフグフこれがヒマラヤよ』
『昨夜ヤクがうるさくて眠れなかったよ』
『ヤク立たずめ』 『.....？』
『メシまずいね、肉食わせろっていつてみるか』
『ヤクしめるか』 『.....？』
『これが氷河湖か、冷たくてうまいよ』
『水筒に詰めて日本で売るか』
『ぼろは着てても心は錦といきたいね』
『ホントお前何か臭うよ』
『苦ヒ-ヨ-、もうだめかと思ったよヒエー』
『頂上だー、エベレストだー、カメラだー』
『ハヒエー、ヒエー河だ』 『氷河だろー』
『ヒヨー』 『.....』

残念紙面がつきた。機会がありましたらまたお会いしましょう。

フェリ・ベトゥンラ！

行って来ました

「不思議な国ネパール」へ

太田隆子

私達親子と友人がカトマンズ空港に降立ったのは、夏休みに入って直ぐのことでした。

まず、ビックリしたのは、空港から一歩外に出て、迎えの車に乗ろうとした時のこと、大勢の人がワッと私達を取り囲み荷物を無理矢理奪い取るようにして、勝手に車に積み込もうとしたのです。そして彼らからチップ・日本製のボールペンなどをねだられた時、娘は相当驚いたようでした。

翌朝、町を歩いてみると、人、人・・・と犬、ゴミがやたら目に付きました。

私達が訪れたこの時期は雨期で、毎日、夕立のように雨がザーと降っていました。

道路のあちこちに水溜まりやゴミがあるため、路傍の神々や古い木彫りの飾りが美しいお寺などを眺めたいのですが、まず、自分の足元の安全を確認せねばならず、何か落ち着かないのは、日本人だからでしょうか。

本当にこの国の人は、家の中に籠もらずに皆外に出ているようで、どの道路にも日本の歩行者天国のように、しゃがんだり歩き回る人が多く、賑やかなことこの上ないのです。

さらに、その道の両側には、小さなお店がビッシリと並んでいて、買い手よりも売り手のほうが多いくらいです。



カトマンズの友人宅での送別会

また、この道路での車の走り方がスゴイのです。

交通規則なんてものは無いのだろうと思わざるを得ない位に、「どけどけ」とばかりにクラクションを鳴らし、対向車線の区別もない中を追い越せそうな物は、牛でも車でも人でも何でもバンバン追い越して行くのです。

おまけに、定員も無いらしく、乗れるだけ詰め込むので、20年前のカローラの後部席に大人が4人、助手席に2人乗りギュウギュウで走っていることもありました。

あげれば、きりが無い程ルールも生活観も全く異なる国に飛び込んでしまった私達親子は、初めの頃はオロオロするばかりでしたが、ネパールの友人とその家族に助けられてカトマンズとその周辺を楽しく見学できました。

なかでも、ポカラでは、教会において障害児の教育に情熱を注がれている大木先生(神父)とお話ができ、更に先生のご紹介で、日本人の2人のシスターが中心になって運営されている保育園をも見学できました。

ネパールでこんなに頑張っている日本人を見て、娘も私も大変感動しました。

そしてカトマンズに戻って、ベルダレルネーヨが支援しているホームにも伺い、42人ものストリートチルドレン(0歳から19歳まで居る)を世話しているビシュヌご夫妻にお会いしてみて、たとえ貧しい国にあっても、このように大勢の人に「愛と勇気」を与え続ける人がいることを知って、心が暖かくなったのは私達だけではないでしょう。

そして、同時に、このような人がもっと増えることを望むべきなのか？それとも、家族も帰る家も無い子供が生まれない国にするには？・・・などと思いは複雑になるばかり。

それでもお陰様で、多くのネパールの知人にも会え、美しいヒマラヤの峰も見え、思ったとおり実り多い素敵な旅でした。

この複雑な不思議な国をもっと知りもっと身近に感じるには、まだ何回も足を運ぶ必要があるようです。

活動トピックス

ネパールのフェアトレードの現状と活動紹介

(第2回 学習会)



講師：チャンドラ・プラサド・
カティパティ
通訳：鈴木香子
司会：魚谷早苗

9月21日、栄区の本郷地区センターで、「ネパールのフェアトレードの現状」と題して、学習会が行われました。当日は、25名の参加があり、具体的な例を交えてのお話は大変に分かり易く、参加者は終始熱心に聞き入っていました。

講師のチャンドラさんは、横浜市海外交流協会の事業を通じ、研修生として来日中。彼はフェアトレードNGO・サナ・ハスタカラを取り仕切っているマネージャーで、来日1ヶ月で覚えた日本語で挨拶。その後、ネパール留学から帰国した直後の鈴木さんの通訳で、お話しもスムーズに進行。終了後の懇親会へも全員参加という異例の盛り上がり。名古屋からの参加もあり、とても充実していました。皆様、ご協力、ありがとうございました。

以下、ごく簡単に要点のみをご報告します。ネパールのフェアトレード7団体はネットワーク・FTGネパールを組織化し、国際的ネットワーク(IFAT)にも昨年加盟、収入の低い女性や貧しいコミュニティのために力をつけ、継続的にフェアトレードを行おうと努力しています。チャンドラさんは、銀行や生協勤務を経て、8年前サナ創立と共に加わり、フェアトレード推進に力を尽くしています。今回はコープかながわとネパリー・バザールで研修を受け、日本のフェアトレードの現状、消費者ニーズ、売り場づくり等について学び、ネパールのために役立てようと張り切っています。

フェアトレードグループ・ネパールの7団体 (1996年11月現在) Association for Craft Producers (ACP)

設立：1984年

対象者：850名の低所得者。

ネパール全土の17地区で、85%は女性。

Janakpur Women's Development Centre (JWDC)

設立：1989年

対象者：ジャナカプル地域の52名の生産者
収入を生み出す活動に加えて、JWDCは、識字や育児のプログラムを運営している。

Kumbeshwar Technical School (KTS)

設立：1987年

対象者：955名の女性生産者

240名の子どものための小学校と23名のための孤児院を運営している。また、立場の弱い男女に、編み物、絨毯織り、木工の職業訓練をしている。

Mahaguthi

設立：1984年

対象者：700名の生産者のうち97%が女性。
マハグティが設立以来12年間、生産者ネットワークを100グループ700名にまで広げた。この間、マハグティは貧しい女性たちのために300万ルピー以上を寄付し、生産者ネットワークの便宜のためにさまざまな福祉プログラムを行っている。

Manushi Arts and Crafts

設立：1991年

対象者：140名の生産者の全員が女性。

75%は、カトマンズの都心に住む貧しい人たち。

マヌシは染め、刺繍、縫製の技術訓練を提供し、地域での就職を可能にしたり、自ら事業を始める助けとなっている。

Sana Hastakala

設立：1989年

対象者：95の生産者団体から製品を集めている。90%が女性。

手工芸品生産者のための小売り・卸となっている。ネパールの工芸品への認識を高める活動や、トレーニング、設備購入のサポートのために収入の20%を充てている。

Women's Skill Development Project Pokhara (WSDPP)

設立：1991年

対象者：19名の生産者(全員女性)

地元の女性に訓練と雇用の機会を提供している。

レポート：土屋完二

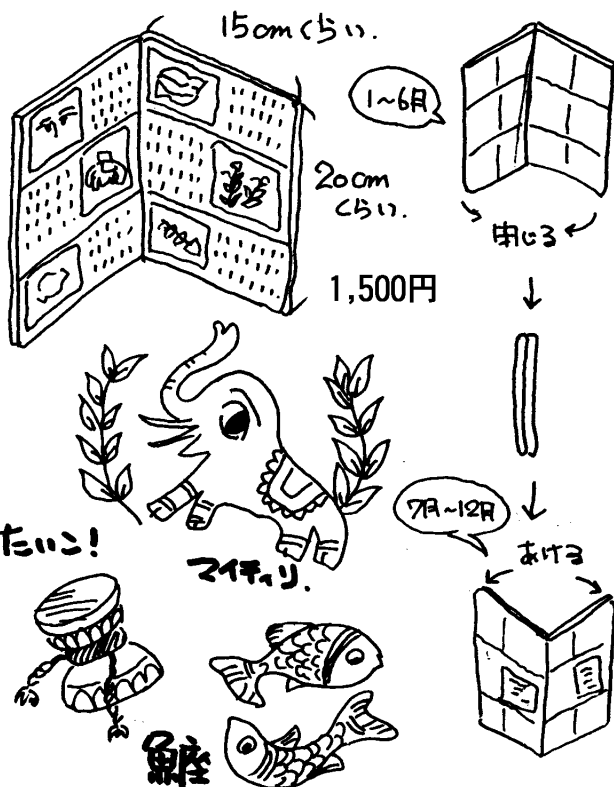
あ!これ不思議

このコーナー毎回名前が違ふような気がします、あまり固いことは言わないでね。

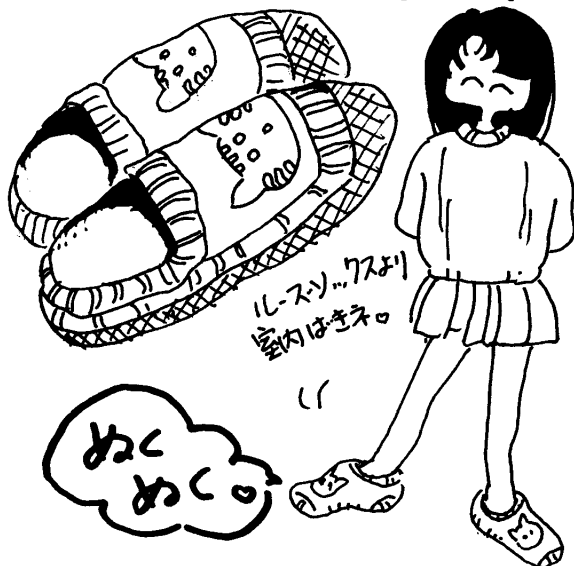
毎年恒例の不思議不思議カレンダーが届きました。不動のリピーターが大勢いるこのカレンダー。今年は星座柄に加え、ネパールの楽器、マイティリ絵画など楽しい柄が増えました。もちろん日本の祝祭日記載。

まだご存じない方にご説明いたしましょう。このカレンダーはちょうどハードカバーの本を開いて立てるような卓上型のカレンダーで、6ヶ月毎に前後に開くようになっているという、不思議な作り。

手漉きのリサイクルペーパーを使い、版面の絵には1枚1枚手で彩色するという手間のかかるものです。1つ1つ色合いが違ふのでご希望の方はご連絡ください。お使い物にもぴったりです。



あ!これ新しい



もう一つはこれから来る冬を暖かく乗りきるための、グッズ紹介です。

ねこちゃんの顔が編み込まれている室内履き。カトマンドゥのとなりパタンにあるクンバシュワールテクニカルスクールで、製作された物です。

色が一つ一つ違ふのでご興味のある方はご連絡ください。大きさはMサイズ、Lサイズ揃ってます。

心のこもった手編みの室内履きで、女性の大敵!「冷え」ともさよならしてくださいね。

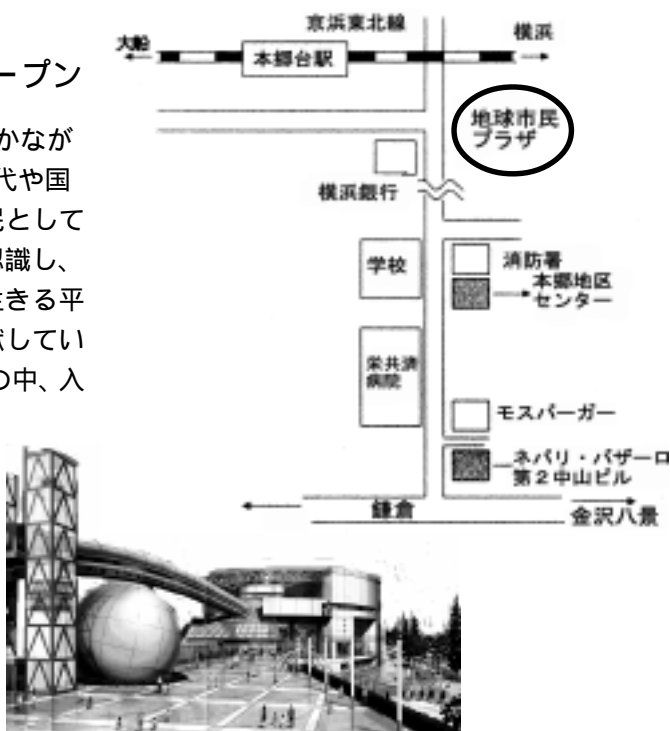
廣田麻紀子

フェアトレードショップ 「ベルダ」オープン

横浜・本郷台に98年2月「地球市民かながわプラザ(仮称)」が開館します。世代や国籍などの違いを超えて集い、地球市民としての意識を養い、平和の大切さを深く認識し、国際理解・交流・協力を柱に「共に生きる平和な国際社会」の創造に地域から貢献していくことをめざして開設されます。その中、入り口横にネパリ・バザーロが直営店として、フェアトレードショップ「ベルダ」をオープンします。

多くの方達の「お店はないの?」というご期待にやっとお応えできます。

ご来店を心からお待ちしています。
スタッフ・ボランティア募集中!!
お問い合わせください。



<インターネット ホームページ>

ネパリ・バザーロ/ベルダ レルネーヨのホームページでは、ネパールのこと、フェアトレードのことなど詳しい情報をお届けしています。

<http://www.yk.rim.or.jp/~ngo/>

<図書のご紹介>

「行ってみようあのお店」

フェアトレードの本」

発行:ネパリ・バザーロ 定価:509円



3週間のネパール滞在中4回バンダ(ストライキ)があって、仕事が終わるか心配。何とか目途がついたら、帰国の日がまたバンダ。空港までどうやって行きたいの??? (春代)



今夏のネパールは、カメラを抱え生産者を撮影、障害者施設も訪問でき、目の回る楽しさでした。(早苗)



チャンドラさんが来日。元気に研修、学習会、ホービットをしています。その間、ネパールで帰りを待つ妻・コラさんを思いやる姿に胸を打たれました。(完二)



ネパールから届いたセーター。ひとつひとつにネパールの手作りの暖かさが感じられます。(洋子)



今年も秋・冬のイベントシーズンに突入しました。
忙しくなりそー!! (麻紀子)



この秋もイベント・交流会が目白押し。その準備・片付けに追われている内に今年もアツと言う間に暮れてしまうのでしょうか。(昌治)

発行所: ベルダレルネーヨ
ネパリ・バザーロ

〒247 神奈川県横浜市栄区桂町274-15
第2中山ビル3階
Tel:045(891)9939 Fax:045(893)8254

1997年10月発行

編集責任者: 太田昌治

編集担当者: 土屋春代 土屋完二

廣田麻紀子 魚谷早苗

春山洋子

この通信は、再生紙、エコペーパー100で作られています。